

稀有ナル腸石形成ニ因スル腸閉塞症ノ一例

高知市楠病院外科(科長宮本哲博士)

田 内 尙 民 述

緒 言

腸石ハ大別シテ次ノ三種ニ分ツヲ得ベク

一、腸石 Darmstein 主トシテ食物ヨリ成リ大抵ハ小ニシテ栗實大以上ニ至ルコトハ稀ナリトセラル、往々其核トシテ果實ヲ有シ食物残渣及磷酸鹽類、碳酸鹽類、石灰等ノ沈着ニヨリ成立スルコトアリ、歐米ニ於テハ屢々塗料トシテ使用スル「シエラック」溶液ヲ飲用スルコトニヨリ「シエラック」石ノ腸管内ニ生ズルコトハ其報告尠カラズ、其他「ザロール」「マグネシウム」等ニ因ル藥物石又ハ精神異常者ニ於テ胃中ニ發見セラルルコトアル毛髮石モ亦腸石トシテ極メテ稀ニ腸中ニ見ルコトアリ。

二、糞石 Kotstein 全ク石ノ如キ硬度ヲ有シ糞便ヨリ生ズルモノニシテ時トシテ著シク大トナルコトアリ、屢々核トシテ果實、異物、寄生蟲等ヲ有ス。

三、糞腫 Kotumor 主トシテ結腸又ハ憩室中ニ生ズ。

之等ノ廣義ノ腸石ハ其大部分ニ於テ糞便ト共ニ肛門ヨリ排出セラル、運命ニアルモ往々ニシテ之等ノ腸石ニヨリ腸管閉塞症ヲ起シ外科的手術ヲ要スルニ至ルコトアリ、就中「シエラック」石ニヨル腸閉塞症ノ文献ハ尠カラザルモ其他ノ腸石ニヨル腸閉塞症例ノ報告ハ極メテ僅少ナルモノナリ。

其他腸内異物トシテ腸閉塞症ノ原因トナルモノハ過ツテ嚥下セル種々ノ異物、蛔虫ノ團塊及膽石等ニシテ就中膽石ガ小腸中ニ介在シテ爲ニ腸管閉塞症ヲ惹起セル報告例ハ珍トスルニ足ラズ、余ハ最近從來ノ文献上報告ヲ見出ス能ハザル乾

柿ヨリ成ル巨大腸石ガ小腸中ニ存在シ爲ニ腸閉塞症ヲ起セル一例ニ遭遇シ其成立ニ興味アリト 思惟スルヲ以テ茲ニ報告
セント欲ス。

症 例

野々下某、男、十五歳、學生

既往症、生來健康ニシテ著患ヲ知ラズ時々下腹部ノ疼痛ヲ來セシコトアルモ
輕症ニシテ常ニ自然ニ治癒スルヲ常トセリ。

病歴、大正十三年十二月十九日午前四時頃突然睡眠中臍下部ニ疼痛ヲ來タシ
醫師ニヨリ鎮痛劑ノ注射ヲ受ク、一時之ニヨリ輕快セシモ同日午後ニ至リ再
ビ同部ニ疼痛ヲ訴フニ至リ便通放屁ナク、爲ニ同醫ハ蓖麻子油ヲ與ヘタルニ
間モナク吐出シ爾來嘔吐嘔氣ヲ催シ腹痛ハ増劇シ、數回ノ浣腸ヲ施サレタル
モ排便更ニナシ、其ノ後日ト共ニ腹痛ハ増激シ同二十二日及二十三日一回宛
高壓浣腸ヲ受ケタルモ更ニ排便ナク發作性腹痛甚シク病床ニ呻吟スルニ至リ
腹部モ亦膨滿シ更ニ輕快ノ徵ナク仍テ本院ヲ訪フニ至レリ。

初診、大正十三年十二月 十三日。

現症、體格營養中等度、苦悶狀顔貌ヲ呈ス、脈搏八十六緊張弱、體溫三十七
度四分、腹部ハ一般ニ稍膨滿シ腸蠕動充進ヲ著明ニ視且觸ル、壓ニヨリ臍ニ
接シ其右上方ニ約鶏卵大ノ左右ニヨグ上下ニ僅カニ移動性ノ壓痛アル腫瘤ヲ
觸知ス、其表面平滑ニシテ硬度鞏ナリ、胸部臟器ニ異常ヲ認メズ。

尿中、蛋白ナク「インディカン」反應陽性。

手術所見、大正十三年十二月 十四日。

「クロ、フォルム」「エーテル」混合麻醉ノ下ニ正中切開ニヨリ腹腔ヲ開ク、
腹腔内腹水ヲ認メズ虫様突起ニ異常ヲ認メズ、廻盲瓣ヲ去ル約百二十糎ノ上

考 按

茲ニ於テ余ハ本例ニ於ケル腸石ハ嗜好品トシテ食サル、乾柿ヨリ成立セシモノナルベキヲ直覺シ仍テ患者ノ既往症ヲ

方小腸ノ一部ニ於テ腸管ハ約大鶏卵大ノ腫瘤ニヨリテ滿タサレ該部ノ腸管ハ
擴大緊張シ暗赤色ヲ呈ス、ソレヨリ上部ノ腸管ハ鬱血擴張シ以下ハ著シク萎
小セリ仍テ腫瘤上ニ於テ腸間膜附着部ノ反對側ニテ腸ノ長軸ニ平行セル約五
糎ノ切開ヲ腸管ニ加ヘ鶏卵大ノ卵圓形ノ腸石ヲ抽出セリ、其際腸粘膜ト腸石
トハ密ニ接着シ膜狀ノ粘液及腸内容ノ少許腸石ノ表面ニ附着セルヲ認ム。

腸管ノ創口ハ全層縫合及ランベール氏縫合ニヨリ閉鎖シ次デ腹壁創ヲ縫合シ
腹部ニ殺菌セル濕布繃帶ヲ施セリ。

術後經過良好ニシテ全ク無熱ニ經過シ翌日ニ至リテ放屁次テ自然便ノ排泄ア
ルニ至リ腹壁創モ一期治癒ヲ營ミ術後二週間ヲ經テ全ク健康狀態ニ復セリ。
腸石所見、卵圓形ニシテ六・五—三・五—三・五糎、重量二十八瓦ノ大サヲ有ス
腸石ノ表面ハ暗黒色ニシテ小顆粒狀ヲ呈ス表面ニ粘液及黃色糞便ノ薄層少許
附着ス、硬度彈力性硬ナルモ刀ヲ以テ容易ニ割斷スルコトヲ得タリ。

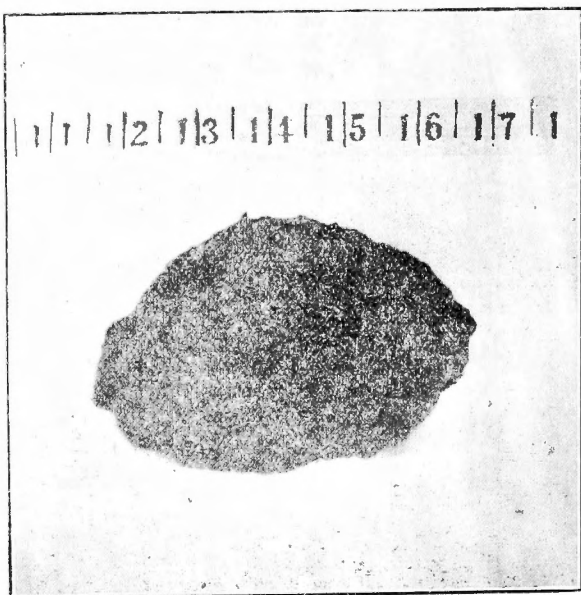
剖面、中心部ハ色一般ニ淡褐色ニシテ周邊部ハ黑色ノ凡〇・二糎ノ薄層ヲ以
テ輪狀ニ包被セラル、淡褐色ヲ呈セル中心部ノ剖面ニ於テハ種々ノ方向ニ錯
走セル纖維狀ノ淡褐色同質性ノ平滑ナル索狀物ガ一部ニ於テハ渦狀ニ一部ニ
於テハ不規則ナル方向ニ併列セルヲ見ル、而シテ之等ノ間ハ褐色ノ細顆粒狀
物ヲ以テ密ニ滿サル、剖面ノ所々ニ黑色ノ扁平ナル粟粒大ノ「柿ノ種」ガ原形
ノマ、明カニ點在性ニ多數認識セラル。

詳細ニ詮議セシニ患家ニ於テハ柿ノ收穫豊富ナリシ爲初冬ニ於テ乾柿約六百個ヲ作製シ置キタリシニ、患兒ハ發病前約一

ケ月間ニ於テ連日少キモ數個多キ時ハ數十個ヲ貪食シ總計三百以上ヲ食シタリト云フコトヲ確メ得タリ。

之ノ得タル既往症ト腸石ノ割面ノ所見ヨリシテ本例ノ場合ハ明カニ乾柿ノ過食ニ因ツテ生ゼルモノニシテ、其成立ハ單一ナル乾柿ニアラズシテ咀嚼嚥下セル乾柿肉質ノ塊團狀ニ集積セルモノナルコトハ明ニ其割面ニ於テ證明シ得。

由來柿 (Kaiki-Baum) ハ溫帶、熱帶植物トシテ日本、支那、印度ヨリ西ハ地中海沿岸ニ生ジ殊ニ我國ニ於テハ嗜好品トシテ賞用セラル、モノ、一ツナリ、殊ニ小兒ニ於テハ之等ノ過食ノ機會アル可キヲ以テ本例ノ如キモノ又稀ニ他ニ有リ得ベキモノト思惟ス。



Literatur.

- 1) Bellmann, W.; Ileus durch Schellackstein im Dünndarm. Deutsch. Zeitschrift f. Chir. 1919 Bd. 149, S. 127.
- 2) Brunzel, H. F.; Über eine eigenartige Form des paralytischen Ileus nach (seiner roher Vegetabilien. Deutsch. Zeit. f. Chir. 1918 Bd. 145, S. 1.
- 3) Fischer, H.; Darmsteine als Ursache des Ileus. Deutsche Gesellschaft f. Chirurg. XVII Kongress. Zentralbl. f. Chirurg. 1888, S. 52.
- 4) 林 健; 消化管内ニ於ケル異物ニ就テ. 日本外科学會雜誌. 明治三十三年, 第二回, 三百五十六頁.
- 5) 林 健; 消化管内ニ於ケル異物ニ就テ追加. 日本外科学會雜誌. 明治三十五年, 第四回, 五十五頁.
- 6) 小林壽郎; 腸管閉塞狀ヲ呈セル藥物結石ニ就テ. 日本外科学會雜誌. 大正十年及十三年, 第二十回, 百八十二頁.
- 7) 押川公介; 乳兒ノ巨大糞石. 日本外科学會雜誌. 大正六年, 第十一回, 第六號, 百六十六頁.
- 8) Sil, J.; Ileus durch Fremdkörper. 5. Kongress tschechischer Naturforscher u. Ärzte. 1914. Zentralbl. f. Chir. 1915, S. 503.

- 9) 藤田廣實; 腸石ノ癥塞ニ因スル小腸不通過症ノ一治驗, 日本外科學會雜誌, 大正十二年及十三年, 第二十四回, 四百三十八頁.
10) Thomas, J. Telfer; Intestinal obstruction from an unusual cause. Brit. med. journ. 1912. Ref. in Zentralbl. f. Chirurg. 1912. S. 1180.
11) Wagner, Arther; Ileus durch Gallensteine. Deutsch. Zeitschrift f. Chirurg. 1914. Bd. 130. S. 353.

本稿ヲ終リシ後日本外科學會雜誌第二十六回第一號ニ於テ九大三宅外科教室窪田孝氏ノ植物性纖維腫ノ六例ノ報告ヲ入手セリ、ソノ中二例ハ柿實ニ因スル胃石形成ニシテ余ノ例ノ如ク腸石トシテ腸閉塞症狀ヲ起セル症例ニアラズト雖モ其ノ成立ニ於テハ全ク同一ノモノニシテ前記余ノ推想ヲ明カニ裏書セルモノナリ茲ニ併セテ追記ス。